

はたして、文学部において「教育」とは可能なのだろうか？

人文科学研究院 坂本 勉

キーワード：文学部教育 (education in faculty of letters), コア・カリキュラム (core-curriculum), 思考力・表現力 (ability to think and express), 基本的教養 (basic culture), 総合的視野 (global stand-point)

1：はじめに

そもそも、文学部において「教育」などというものが可能なのであろうか？私が学生の頃、某大学の某大先生は、「教えんと分からんような奴は教えても分からんのだ」とおっしゃっておられた。今のご時勢では、教育放棄であるとして大いに糾弾されそうな発言である。確かに、一見したところ、無茶な理屈のようだが、「教育」とは何かについて真実を語っているようにも思える。つまり、本人（学生）が努力して、苦勞して、時間をかけて、やっと手に入れたものが、本当に「分かったもの」であり、他人（教師）から「教えてもらった」知識などはすぐに忘れてしまうものである。では、大学に文学部があり、そこに教師と学生が存在するという事実・現実はどうなるのであろうか？ここには、学問の伝統・継承という問題がある。自らの力で何かを見出し、創造していくためには、先人たちの言葉に耳を傾けなければならない。新しいものは、全くのゼロから産まれるのではない。古いものに何かを付け加えることによってしか新しいものは産まれてこない。別の言い方をすれば、新しいものを産み出すためには、古いものを学ばなければならないのである。では、大学、特に文学部において教育可能な部分（分野）と不可能な部分があるとすれば、それらはどのようなものなのであろうか？また、なぜそのような相違が生じるのであろうか？さらに、教育可能な部分があるとしても、それを行うことにどのような価値・意義があるのだろうか？要するに、教育可能であり、かつ、教育するだけの価値がある部分（分野）を明確にしなければならない。そこで、学部教育における必要最小限の共通カリキュラムの可能性について検討するためのプロジェクトが実施された。これは、「コア・カリキュラム（文学分野）の研究・開発」プロジェクトと呼ばれるもので、平成9年度から11年度にかけて、文部省の委嘱を受けて、九州大学文学部を拠点校に、国立・私立の八大学、東北大学文学部、金沢大学文学部、名古屋大学文学部、神戸大学文学部、学習院大学文学部、玉川大学文学部、日本女子大学文学部、早稲田大学文学部が協力校として参加し、計九大学によって実施された。このプロジェクトには上記の大学の多くの教員が関わっていたが、特に、池田紘一先生（平成16年3月、定年退官された）と納富信留先生（平成14年3月、慶応義塾大学に転任された）が中心となって推進されたものである。ご苦勞なされたお二人の先生方が九州大学にはいらっしやらないので、このプロジェクトに関わっていた筆者が報告書の一部をここに再録し、諸賢のご批判、ご意見を仰ぐことにしたい。なお、この報告書の詳細は、<http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/core/>にて参照できる。

2： コア・カリキュラムと文学部

全体を通じて最も論議を費やしたのは、コア・カリキュラムとは何かという根本問題である。「コア・カリキュラム」という概念そのものはアメリカ合衆国に由来し、リベラルアーツ教育において中核（コア）をなすいわば「全人教育」のための教育課程であるが、その背景にはアメリカ合衆国独自の教育の理念と歴史があり、さまざまな点で事情の異なるわが国ににわかに移し置くことはできず、また、この教育に関する種々の研究や報告を見てもその実情や効果については判然としない点が多い。本プロジェクトでは特に、文学部のコア・カリキュラムと教養教育、および専門教育との関係がつねに問題となった。

いま一つの問題は、文学部の多様性である。一口に文学部といっても、その設置形態と内容は多種多様である。ある意味では当然のことでもあり望ましいことでもあるが、本プロジェクト参加大学だけをとりとめてみても、国立大学と私立大学で、また国立大学間、私立大学間でも、各大学の歴史、理念から、置かれている専門分野の種類、教員数、学生数に至るまで、さまざまな面で異なる。『全国大学一覧』（平成11年度）を見ても、文学分野に属すると思われる学部は国・公・私立で二百以上にのぼり、学部名称も「文学部」、「人文学部」にとどまらず、学科名称に至っては実に千差万別である（特に平成3年の大綱化以降この傾向が強い）。このような大学間の差異は、コア・カリキュラムを考える場合にも決して無視できない要因であり、コア・カリキュラムの共通理解にさまざまな難問を生じさせた。

しかし個々の名称はともかく、文学部として括ることのできる諸々の教育・研究組織は、フィロソフィア（知・ソフィアへの愛）とフィロロギア（言葉・ロゴスへの愛）を基礎に、フマニタスの学（「人文学」、「人間の学」、「人間の研究」）を目指すという根本理念において太い絆で結ばれていることは明白である。学問と社会の進展は、文学部においても新たな学問分野を生んできたし、今後さらにさまざまな可能性を切り開いてゆくであろうが、その中核にこの根本理念が息づいていることは疑いえない。文学部は大学において、このような理念に基づいて直接に人間と精神文化に関わっている唯一の学部である。これは研究の根本であるばかりでなく、学部教育の根本でもある。

3： コア・カリキュラムの提言

このような観点から学部教育の在り方を問うなかで、われわれは、プロジェクト参加大学間の差異を乗り越え、コア・カリキュラムに関して一定の合意に達した。それは以下のごとくである。

1) コア・カリキュラムにおいては、文学部の理念と研究・教育の特色を生かし、人文学的素養を身につけ真の知性と品格をそなえた人間を養成することを目指す。

2) コア・カリキュラムは、文学部の各専門分野（専攻）の垣根を越えた、文学部全学生のための必要最小限の共通カリキュラムとする。

3) コア・カリキュラムは、文学部の1年次から4年次までの学部教育全体のなかに位置づけられる。

コア・カリキュラムは次の三つの基本的な柱からなるものとし、それを実現すべき授業科目群をおく。

「思考力・表現力」の養成

「基本的素養」の養成

「総合的視野」の養成

報告書では、第 1 章で研究・開発の経緯について述べ、第 2 章でコア・カリキュラムの背景となる文学部の研究・教育の特色を述べ、第 3 章でコア・カリキュラムとの関連における文学部教育の現状と課題に触れている。つづいて、第 4 章でコア・カリキュラムの枠組みと基本的な柱について説明し、第 5 章でコア・カリキュラムの履修型と授業科目群を提示し、具体的な授業科目例をシラバスの形で提示する。最後に第 6 章で、論文作成と口頭発表の技法の養成を特に念頭においた履修型の一例を授業科目案とともに示している。

先にも述べたように、プロジェクトに参加した九大学の間でも、また全国の諸大学間でも、それぞれに事情が異なっている。従って、コア・カリキュラムの中身の具体的な組立て（学部教育全体における位置づけや単位数など）、授業科目の内容や形態等については、各大学の文学部がそれぞれの事情に応じて、それぞれの責任において、自主的に決定すべきものであることは言うまでもなく、報告書もプロジェクト参加大学のこのような了解のもとに作成された。この提言は、今後21世紀の文学部教育の在り方を模索していく上で、全国の大学におけるカリキュラム作成に何らかのヒントとなることを希望して、提示するものである。

なお、報告書には「付論」として「文学部における言語教育」が付されている。言語は文学部の諸学問の不可欠の道具であり、また人文学の理念を体現する一つの核であって、他学部の場合とは比較にならない重要性を有している。それゆえ「付論」において、その重要性和意義に注意を促すという形をとった。

4： 文学部教育の可能性

各大学の諸改革、国立大学における教養部の解消など、近年の大学の変化は目まぐるしく、文学部においてもあるべき学部教育の姿を求めてさまざまな試みがなされてきた。現に各大学がそれぞれに特性を発揮すべくさまざまなカリキュラム上の工夫がなされている。その得失を云々するのは時期尚早であるが、しかしこのような動きのなかで、かつては明確であった文学部の「学部」としての共通の基盤が揺らぎ、共通の理解が失われつつあることも否めない。このプロジェクトはこのような状況のなかで、各大学、各専門分野の相違を越えて、文学部の学部教育の共通の核となるものは何かを、コア・カリキュラムに焦点を絞って模索しようとしたものである。

特に文学部は、人間と精神文化の問題に直接、深く広くかかわる普遍的な学問研究と教育の場として、本来大学の中核をなす存在であり、また一般社会に対しては、文化の継承発展の支柱となる人材、優れた判断力と高度の知性をそなえた人材を、研究職、専門職、一般企業を問わず社会のあらゆる分野に送り出すことによって、人間社会の営みの最も根幹の部分で重要な貢献をなしてきた。

一方では良き伝統を守り，他方では現代の時代的要請に応えながら，文学部ならではの人材をさらにいっそう良く育成するにはどうしたらよいか，叡智を集めて再考していくことが，一国の文化を根幹で支える唯一の学部としての文学部の使命であると考えられる。このプロジェクトにおいても，さまざまに事情の異なる大学間で議論をたたかわせたことは自らを振り返るという意味においても実に有意義であった。このプロジェクトの報告書を，各大学の文学部が学部教育の未来を考える際の参考として，さまざまな形で利用していただければ幸いである。

5： 文学部の研究・教育の特色

コア・カリキュラムは，文学部の教育全体のなかに位置づけられる以上，文学部の研究・教育の理念と不可分の関係にある。ここでまず，文学部の研究・教育のもつ特色を改めて考えてみることは無駄ではあるまい。

もちろん文学部と一口にいってもその設置形態も中身もさまざまであり，各大学における位置づけも大学の理念や学部構成（どのような学部から構成されているか）によって種々異なるであろう。また，それぞれの文学部は独自の理念と特色を有し，置かれている学科や専門分野の種類や数もさまざまであり，それに従って，どの学科や専門分野に力点を置くかも異なるであろう。それは，さまざまな文学部がその特色を生かし，研究においても教育においても独自の役割を果たすという意味で望ましいことでもある。しかし，たとえどれほど異なる面があろうとも，それが文学部，人文学部，あるいはそれに類する学部である以上，あらゆる相違を越えて共有している基本的特色があるにちがいない。またその把握なくしては，各文学部に共通のコア・カリキュラムのごときものを考えることはできない。それゆえ以下で，文学部の研究・教育の重要な特色について考察し，文学部コア・カリキュラムのいわば基盤を示すことにする。

(1)基礎学としての人文学の理念

大学には多数の学部が存在するが，文学部とは，フィロソフィア（知・ソフィアへの愛）とフィロロギア（言葉・ロゴスへの愛）の精神に基づき，フマニタスの学（「人文学」，「人間の学」，「人間の研究」）を多様な角度から実現する唯一の学部である。人間は自然的・社会的存在であると同時に精神的存在であり，そこに人間の人間たる所以がある。人間にとっての最大の謎と関心事は人間であると言ってよい。この中心的問題に真っ向から取り組み，人間の在り方と活動を全体として捉えようとするのが文学部なのである。従って，文学部はたしかに大学の一学部ではあるが，根本的な意味で人間にかかわる営み全てを包みこむ拡がりをもっており，そのような拡がりを人文学という一つの理念が担っている。従って，文学部の最大の特色と価値は，大学の諸学問の中核ないしは基盤として，大学における研究と教育を統合する要であるという点にあり，この意義と自らの役割を自覚し，その特色を十全に発揮してこそ，学問においても，社会に対しても大きな貢献をなすことができる。

むしろ大学におけるすべての学問研究は何らかの仕方で人間にかかわっている。社会科学は言うまでもなく，自然科学も人間を主な研究対象とする，人間のための研究である。しかし，その対象や研究方法の面から見るかぎり，それら諸学問分野は，人間の身体やこころや社会を特定のさまざま

まな角度から分析する局所性を特徴としている。ごく大まかにいえば、人間の所産としての社会や法や政治・経済の研究、そして生物としての人間の研究、人間をとりまく自然界の物質やそれらを操作する技術の研究というぐあいに、大学でのそれぞれの研究はどこか特定の観点から人間の諸側面を浮かび上がらせている。他方、これらの諸側面のあいだに有機的なつながりを見出すことで人間の在り方や活動の全体的把握をもたらすのは、人文学という文学部の学問の役割にほかならない。言い換えると、大学での全学問研究を人間への関心において一つの学問に結びつけ、そこにわれわれの生と世界の全体像を見せてくれるのが、文学部なのである。

人間のこころの探究から物質や技術の研究に至る諸学問分野も、大学での学問である以上、むしろ一本の糸でつながっているであろうし、またつながっていなければならない。今日学際的研究の必要性がいわれているのも、そのようなあるべき紐帯への模索の現われであろう。けれども、この紐帯の根本をなすものが人間による人間への関心である以上、文学部こそその要となり中核とならなければならない。従ってまた、応用を旨とする諸学問分野、特に理科系の学問分野に対して批判的かつ建設的な、包括的・普遍的観点を提供できるような研究・教育がなされることも文学部に課せられた大きな課題なのである。

(2)言葉の重視

文学部のいま一つの大きな特色は、言葉の重視である。たしかにいかなる学問分野であれ、言葉を何らかし手段として用いないものはない。しかし言葉を直接の対象とし、言葉の批判的検証を主たる課題とする学部は、文学部 (Faculty of Letters) を措いて他にない。哲学思想であれ、文学作品であれ、歴史史料であれ、それは文字となった言語テキストであり、文学部での研究はいわば言語テキストのなかに人間の営みを探るのである。言葉を通じてそこに示された人間精神の現われを考察し、その意味を求めるのである。文学部の諸専門分野において文献批判(テキストクリティック)に重きが置かれ、これを基礎として研究が進められるのもそのために他ならない。むしろ、美術史や考古学や地理学や社会学のようにフィールドを重んずる分野もあるし、実験心理学のように実験を主たる手段とする分野もある。しかし、それらの分野も含めた諸学問分野が、言葉への関心を核にしながらまとまっているのが文学部なのである。

言語のなかで最も重要なものは、言うまでもなくわれわれが用い生活している日本語である。日本語を正しく理解し、日本語で正しく思考し、日本語で正しく表現するということはもちろんだの学問分野においても重要なことであるが、しかし、この営みと極めて自覚的に関わり、それを対象とし、それによつて的確明快かつ説得的に自らの思考を表現することを使命とするという意味で、文学部において日本語を用いる能力は格別の意味を帯びている。

同時に、諸外国語の習得は文学部の諸学問において、日本語に劣らぬ重要性を有している。まず、外国の文化や歴史を研究する諸分野において、それが重要な手段となることは言うまでもない。しかしこの場合も、諸外国語は単なる手段という以上の意味を担っており、まさに外国語そのものの中に異民族や異文化の意味を探り、人間精神の営みの痕跡を探るといふ点にこそ、外国語理解の最も大きな意義がある。諸外国語の真の理解は、同時に日本語と日本文化、およびそれらが辿ってきた歴史を自覚的に反省し、これをより深く理解するためにも不可欠である。この意味で言葉への主

題的な関わりこそが、われわれが自己を理解するうえで最も重要な道筋なのである。(このように文学部においてきわめて重要な言語教育の在り方については、「付論」で検討されている。)

以上のような意味でのフィロロギアの精神を学生に伝えることは、学部教育においても極めて重要である。言葉に対して自覚的に関わり、言葉と人間の関係について自らの学習体験を通じて深い洞察を獲得し、言葉に対する感受性、愛情、同時にまた批判精神を身につけていること、これこそ文学部学生ならではの特質であり、そのような学生を育成することは文学部教育の重大な使命の一つなのである。

(3)批判精神の涵養

こういった特色をもつ文学部には、対象や方法は異なれ、その対象を人間への関心から理解しようとする態度と対象から距離をおいて批判的に取り扱おうとする態度とが一体となって存在している。

哲学、歴史学、文学、人間科学の別を問わず、また過去の古典的文化遺産や歴史を対象とする場合でも、国や民族を異にする諸文化を対象とする場合でも、あるいは現代の諸問題を対象とする場合でも、それが人間の営みであり所産である以上は、まず第一に対象の側に立って、対象の内側から理解することが必要である。たとえば哲学者のある思想を研究対象とする場合は、一旦その哲学者の立場に立ってその思索をいわば追体験する努力が不可欠であろうし、たとえば歴史的な一事象を研究する場合には、いわば歴史的想像力を駆使してその事象を生み出した歴史的現場に立ってみる努力が不可欠であろう。また、資料やフィールドの調査、実験を通じて実証的な検討を加えながら、そこから対象を客観的に理解していく姿勢も求められる。その意味で文学部の諸学問は、根本的にこうした「理解」からなる学である。

しかしそれと同時に、文学部の諸学問の際立った特色は、それが「批判」の学であるということである。過去と現在とを問わずあらゆる解釈や通念を「果たして本当にそうであるか」と疑い、それを新たに問い直し、さまざまな方法にのっとなって批判的・実証的に検証し、自らの思索を通じて新たな筋道と解釈に至るということ、そしてそれを通じて対象の新たな意義を見出すということ、これなくしては文学部の諸学問は成り立ちえない。その最も強力な武器は古典的遺産に示された人間の叡智であり、多角的なものの見方であろう。

批判と理解が一体となった真の批判精神、すなわち、批判が理解から生じ、その批判が理解をさらに深め、その理解がまた新たな批判を生むといういわば弁証法的なダイナミズム、これが文学部の諸学問を貫く精神である。その根本にあるのが「人間この不思議なるもの」、すなわちわれわれ自身への強い関心であることはくり返すまでもない。

このような批判精神の涵養は、学部教育においても特別な意義を有している。大学に在学する学生の大半は、学校教育と社会的職業生活との中間にあり、特に新入生は、社会的諸事象の前にいわばはじめて自立的に立たされることになる。この不安定な段階で人間として自立し、自らの判断と責任において生きてゆくためには、何よりも通念や幻想に惑わされない的確な判断力を身につけ自己の生き方を見つめる目が必要である。その指針となるものは、何よりもまず文学部的叡智としての批判精神なのである。

(4)多様性とその総合

文学部において多様な専門分野が一堂に会していることは、こういった文学部の在り方を実現する一つの特色をなす。

専門分野の種類や数は大学によって千差万別で一概にいけないが、たとえば哲学といっても東西の古典哲学から現代哲学に至るさまざまな分野があり、現代の要請に応じて科学哲学や生命倫理・環境倫理のような新しい分野も加わってきつつある。また歴史学といっても日本、中国、ヨーロッパの歴史を中心に、さらにイスラムやアジアの諸地域の歴史を扱う分野も次第に増えてきており、その範囲は古代から現代にまで及ぶ。また文学研究の分野にしても、日本、中国、英、米、独、仏の文学はむろんのこと、ロシアやイタリアやスペインの文学からアラビアの文学まで多様な広がりを見せている。さらにこれに言語学や各国語の歴史的・文献学的研究分野が加わる。美術史や芸術学、宗教学、考古学、地理学なども文学部の誇る分野である。そこにさらに、20世紀の現代において極めて重要な地位を獲得した心理学や社会学などの人間科学諸分野、また、文化人類学のような現代的・学際的な分野をそなえている文学部も多い。このような概観からだけでも、文学部の専門分野が如何に多様多岐であるかが分かるであろう。

これら各専門分野は独自のディシプリンと独自の研究の歴史を有し、それに従って研究が進められ、学生もまた最終的にはこれらのなかの一分野を専攻し、専門的教育を受けるとというのが、文学部の基本的な形である。文学部学生は、自らの専門分野のなかで特定のテーマや課題を見出し、それを専門として研究して、その成果を卒業論文、あるいはそれに代わる卒業研究としてまとめている。

しかし同時に、各専門分野は、先に述べた「基礎学としての人文学の理念」、「言葉の重視」、「批判精神の涵養」という点で、根本では軌を一にしており、事実また個別分野の研究においても他分野の研究成果が活発に利用されており、それを利用することなしには研究の進展もありえないであろう。さまざまな分野の研究者の間でなされる学問的対話も極めて日常的なことである。この意味で、文学部という存在そのものが、すでに学際的であるといつて過言ではない。

学部学生もまた、原則的にはあらゆる専門分野の授業科目を履修することが可能であり、奨励されてもいる。学生に意欲があれば、居ながらにして人間研究の万華鏡を覗くことができる仕掛けになっており、文学部での研究を通じて多様なパースペクティブとそれらを総合する視点を獲得することができる。各専門分野がそれぞれにしっかりした核を持ち、同時にあらゆる専門分野に開かれていて、全体として一種の普遍学、ウニヴェルシタスを形成していることこそ、他の学部には見られない文学部の一大特色である。

(5)二つの理念的目標

以上の特色を活かすべく文学部の諸分野に一貫している共通の理念的目標は、次の二つに要約できるであろう。

1) 人類が過去から現在まで営々として蓄積してきた古典や歴史などの伝統的文化遺産、過去のあらゆる人間的な営みの個別的・実証的な研究・教育を通じて、それらの持つ人間文化の基盤とし

ての普遍的意義を探求する。同時に、今日に継承されたこのような文化的伝統に新たな意義を見出し、さらにそれらを未来に伝える展望を獲得することによって、精神文化の充実と発展に寄与する。

2) 現代社会が直面する現実的諸問題、すなわち科学技術の目ざましい発展、価値の多様化、国際化の未曾有の進展、情報の氾濫等がもたらす現代特有の数々の問題に、人文学的観点から取り組み、これらの問題を人間と文化の問題として問い直し、問題解決の指針となるべき展望をひらく。

この二つの理念的目標はいわば車の両輪として一体の関係にある。古典の研究は、現実的・現代的諸問題との緊張関係、生き生きとした対話なしにはわれわれにとって真の意味を持ちえない。他方、現代のかかえる問題は深く人間の在り方や精神文化に関わっていて、一時的な対症療法のみで解決可能な問題ではなく、古来人間が嘗々と積み重ねてきた精神的・文化的・歴史的な叡智と洞察に学び、これを研究することなしには、根本的な克服の道はひらけない。

伝統的に文学部が担ってきた第一の理念的目標についてはあらためて述べるまでもないが、第二の目標について、文学部が現代の抱えるアクチュアルな諸問題、現代の病理とでもいうべき難問の数々に、正面から答えうる唯一の学部であるということはいくら強調してもし過ぎることはなからう。たとえば、今日の世界的危機の一つである民族間の紛争にしても、政治的側面からだけではこれを理解することも解決することもできない。そこでは民族の伝統と歴史、宗教的なパトス、メンタリティー等すぐれて人間的な側面が大きな役割を果たしていることは明らかである。また、たとえばクローン問題や生命倫理の問題は社会的問題であると同時に、根本的に人間の生と死に関わる問題であり、哲学や宗教学、文学などの幅ひろい洞察にたよることなしには論じえない。さらに身近な例として、たとえば今日の社会不安と、それに伴う青少年犯罪の激増や似而非新興宗教に迷い込む若者の急増などの切迫した社会問題も、これを人間としての自己への反省から考える以外に根本的解決の途はない。

文学部の教育は、以上のような理念を背景として、真の教養と広い視野をそなえた、すぐれて人文学的な知性をそなえた人間を育成することにその主眼がある。このような教育のもとに自立性と豊かな人間性をそなえるに至った人物が、将来、社会のあらゆる職業分野で活躍し、たとえいかなる職業であれ、文学部で獲得した人文学的な素養と知識を背景にそれに従事することこそ、一国の精神的・文化的・社会的水準の向上に寄与するものであり、真の意味で豊かな社会の建設に貢献するものである。また将来大学院に進学し、専門研究者の道に進む場合でも、このような真の素養と知性をそなえることなしに優れた研究を行うことは不可能である。

以上のような文学部の理念を確認し、それを十分に実現するものとして、文学部のコア・カリキュラムが考えられなくてはならない。

6： 文学部教育の現状とコア・カリキュラムの必要性

コア・カリキュラムに関して議論し研究・開発を進めるなかで、いくつかの重要な問題が浮かび上がってきた。文学部教育の現状をめぐるそれらの問題を指摘しておくことは、このプロジェクトによって提示されたコア・カリキュラムの必要性を考える上で不可欠であろう。

(1)文学部の多様性

すでに触れたように、コア・カリキュラムを検討する上で浮上した一つの問題は、文学部の多様性である。

a) 文学分野に属する学部は大学によってさまざまな設置形態と内容を有しており、学部名称も、学科名称もかなり多様である。国公立大学と私立大学では、また国公立大学間、私立大学間でも、歴史、理念から、置かれている専門分野の種類、教員数、学生数に至るまでさまざまな面で相違がある。

b) 大学院を有するかどうか、また大学院がどのような理念と形態によって成り立っているかも、学部教育の在り方に多かれ少なかれ差異を生じさせている。これもコア・カリキュラムの現実的運用において無視できない要因である。

c) また、大綱化以来の大学改革において、文学部の構成や学問分野も大きく変化してきており、新規の分野が参入したり、学科の構成が改編されたりすることも生じた。また、「文学部」や「哲学、歴史、文学」といった伝統的な名称がとりはずされる大学も現われている。このような文学部の多様化・流動化が今日の文学部教育に大きな影響を及ぼしている。

d) 大綱化以降、私立大学においては概ね学部教育改革が完了しており、1年次から4年次までの学部教育のなかで意欲的な試みがなされていて、コア・カリキュラムに相当するようなカリキュラムがすでに設定されている大学もある。これに対して国公立大学では学部教育の見直しについて進捗状態に差異がある。特に教養部解消以降の教養教育（全学共通教育）が過渡期の混乱状態にあり、教養教育と学部教育との連携が必ずしもうまく行っていない大学が多い。私立大学と国公立大学のこのような現状の違いを考慮することは、コア・カリキュラムを運用する上では重要であろう。

(2)中等教育との関係

コア・カリキュラムを考える上で、大学入学以前に受けてきた中等教育の在り方が重要であることは言うまでもない。中等教育と大学教育の関係において問題となっている点は、以下の通りである。

まず第一に、今日の中等教育が大学受験の影響で、いわゆる受験教育、偏差値重視に大きく傾いていることはすでに周知の社会的問題となっている。その歪みは文学部のコア・カリキュラムを考える上でも無視できない問題である。理科系諸学部においては数学や物理学・生物学の基礎知識の不足が由々しい結果を招いているが、文学部においても特に文学的素養や歴史的基礎知識の不足が重大な問題として浮上している。

第二に、大学教育は中等教育の基礎の上に成り立つ以上、そこにおいて如何なる内容がどのように教えられているかについて十分な知識を持っている必要がある。特に近年は、数次にわたって「学習指導要領」が改訂されており、中等教育の実情にも大きな変化が見られる。その意味で、大学教

育と中等教育の有機的連関への配慮がこれまで以上に必要であると考えられる。

第三に、高校までの教育と大学での教育には質的に大きな違いがあり、特に自ら問題を発見し、自ら考え、自ら解決を見出すという学部教育の特質に学生が直ちに馴染むことができず戸惑っているのが現状である。その橋渡し（「転換教育」）がどこかで何らかの形で行われる必要がある。

これらの問題はコア・カリキュラムにおいても十分に考慮される必要がある。この点、コア・カリキュラムの検討結果を踏まえて何らかの形で高校の現場の教師との積極的な意見交換をはかることが大切であろう。

(3) 教養教育との関係

大学の全学生が履修することを前提としたいいわゆる全学共通の「教養教育」と文学部コア・カリキュラムとの関係は、プロジェクトの議論のなかで絶えず問題とされた。教養教育については別に「教養分野」のコア・カリキュラムを検討するプロジェクトがあり、それとの関係にも疑問が出された。

特に国公立大学では、教養部の解消後、教養教育の責任母体がなくなり、教養教育をどのような理念でどう立て直すかが焦眉の問題となっている。一般に国公立大学の場合は、文学部に入学したあと1～2年後に学科・専攻を選ぶという形をとっているところが多い。その期間に学生が履修するのは主として全学共通科目（教養科目）であり、そこに若干の基礎ゼミや専門入門科目が配されているというのがおおよその形である。その結果、教養教育を1～4年次の学部教育の全体とどう関係づけ、そこにどのような有機的関連をもたせるかという点で、種々の難問に突き当たっている。

私立大学の場合は大綱化以降の学部教育改革もある程度終わっており、教養教育の位置づけもかなり明瞭であり、教養コア・カリキュラムや文学部コア・カリキュラムに相当すると思われるカリキュラムや授業科目の整備がなされているところもある。

このような現状のなかで教養教育と文学部コア・カリキュラムとの関係を明確にし、この点に関して完全な一致を見ることは至難の業である。従ってプロジェクトでは、この点に関しては柔軟な姿勢で臨み、ごく大まかに次のような基本方針を立てた。

第一に、そもそも文学部学生が大学入学から卒業までどのような教育課程を経るべきかという巨視的な視点に立ち、当該学生の専攻する専門科目以外に、文学部学生としてどのような理念に基づく授業科目を履修することが望ましいかを検討する。第二に、コア・カリキュラムは、文学部の研究・教育の理念に基づき、広い意味で文学部諸専門分野に共通する人文学的授業科目を前提とし、文学部学生に共通の人間的・知的基盤を提供しうるものとする。また、人文学的視点との関連において自然科学や社会科学などの授業科目も必要となってくる。より一般的な教養としては、さらに多くの選択肢が与えられてしかるべきである。

(4) 専門教育との関係

本プロジェクトは専門教育の問題にはまったく立ち入らなかった。学生が多様な専門分野のなかから何らかの分野を自らの専攻として選び、そこで自らの選んだテーマに即して一定の成果を示すというのが文学部の基本的な形である。しかし同時に広く他の専門分野にも学び、多様な視点を身

につけるといふところに専門と総合を旨とする文学部教育の特色がある。

文学部においては、講義においても、専門の最先端の研究成果が披露され、他専攻の学生もこれを聴講するという伝統的な形をとるところが多かった。「哲学概論、史学概論、文学概論」等の講義も、各学科の専門教育の入門という色彩が濃かった。これはこれで大きな意義のあることはむろんであり、いかなる専門授業科目も意欲ある学生に開かれているのが原則である。しかし他面、文学部全学生を視野に入れて、学生が文学部生として是非とも習得すべき基本的な問題について、それを特別の目標として授業がなされるということは稀であった。

各専門分野の先端的研究といえども人文学的理念に基づいていることは言うまでもないが、しかし今日のように専門分野が特殊化・細分化しその特色が見えにくくなっている現状では、従来の授業科目だけで文学部教育が十分有効になされるかどうかについて疑問が生じて不思議ではない。また、多様な分野への関心や人間の根本問題に関する素養と興味が学生のあいだで著しく希薄になっており、ともすれば狭い専門領域に閉じこもりがちである。

こうした現状では、人文学的総合の意味をそれ自体として伝え、その豊かな可能性に目を開かせることも極めて重要であると思われる。学部教育改革のなかですでにそのような試みが行われている大学もかなり存在するが、コア・カリキュラムもまたその一端を担うものでなければならない。

(5)文学部学生に欠けているもの - コア・カリキュラムの必要性 -

コア・カリキュラムとは何か、それは必要か、必要であるとすればそれはいかなる意味と役割を担うべきか、これが本プロジェクトの議論の中心であった。それらの議論全体を通じてつねに問われたのは、いま文学部の学生に何が欠けているか、何が必要かということであった。平成10年度に1年間をかけて各検討部会がコア・カリキュラム授業科目案を考え、それを全体会議で議論した際にもつねにこの問いが念頭に置かれた。「中間報告」に凝縮された具体的な授業科目案の検討は、いわばこの問いに対する答えを見出す作業であったといつて差支えない。

いずれの検討部会でも、また全体会議でも一貫して指摘されたのは、次の三点である。

まず第一に、自ら問題を発見し、自らの力で考え抜いて解決を見出し、それを自らの言葉で表現するという最も基本的な能力の不足という問題点がある。この第一点は、全体会議でも最も深刻に受けとめられ、多くの時間を費やして議論された問題である。

第二に、文学部で勉学に携わる場合にも、そののち一個の人間として社会のなかで自立して生きてゆく場合にも必須の基本的なものの見方や考え方、知識の不足が指摘された。

第三に、一個の問題に直面したときに、その問題の孕む多様な側面と拡がりに目を向け、それを多角的に捉える総合的な視野の不足も目立つ。

これら三つの能力ないしは素養はいわば三位一体の関係にあり、いずれも等しく重要であつて、大学に学ぶ学生であれば誰もが習得すべき基本である。しかし、とりわけ文学部学生にとっては、

どのような専門分野の研究に携わる場合も必須の条件とあってよい特別の重要性を有している。文学部の研究・教育の諸特色を真に身につけ、真に人文学的教養をそなえた知性豊かな人間として社会に巣立ってゆき、有為な社会人・職業人として生きてゆくためには、まさにこのような能力や素養が不可欠であろうし、専門的研究の道を進む場合にもこのような能力や素養なしには多くを望むことはできない。ある意味では、このような能力や素養を身につけさせることこそ文学部教育全体の大きな目標であるといえるかもしれない。コア・カリキュラムが必要とされ、効力を発揮するとすれば、まさにこのような教育においてであろう。

7： プロジェクトのその後の展開

本プロジェクトは、「思考力・表現力」「基本的教養」「総合的視野」の養成という3つの観点から文学部共通のカリキュラムの可能性を探り、具体的な授業案も提示した。そして、この提案を具体化するために、平成12・13年度にわたって、「文学部の学部共通教育に関する研究・開発プロジェクト」が文部科学省の助成を得て行われた。これも九州大学文学部が中心となり、東北大学、金沢大学、名古屋大学、神戸大学の各文学部が協力して取り組んだ。その成果は、『文字をよむ』と『ファンタジーの世界』という2冊の本として結実した。平成14年度から、九州大学文学部においては、「文学部コア科目」の授業において、これらの本をテキストとして用いて、本プロジェクトの理念を実践に移すための試みが始まっている。「文学部における教育」とはどのようなものか、どうあるべきなのか、ひとつの答えが出てくる可能性が見えてきたようである。